

生物研究

第 XVII 卷 第 3・4 号

1973

(終卷記念号)

THE LIFE STUDY

Vol. XVII, Nos. 3・4

(Final Issue)

December 25, 1973

FUKUI, JAPAN

目 次

報 文

台湾産アナバチ科の研究 (XV) (英文)	常 木 勝 次	… (39)
マメギングチバチの習性	田 堃 正	… (50)
樹脂を使用するキユビギングチバチの習性	南 部 敏 明	… (55)
トゲアシギングチバチについての観察	山 田 晴 昭	… (61)
カヤの筒に造られたヒメコシボソバチ類の巣 (英文)	常 木 勝 次	… (63)
トモンハナバチの巣の1例	前 田 泰 生	… (74)
ニッポンジガバチモドキの巣	田 堃 正	… (77)
フクモンアシナガバチの多雌創巣例の発見 (英文)	山 根 正 氣	… (79)
スズメバチ属ハチ類のコロニー内の分業。Ⅲ。外役活動	松 浦 誠	… (81)
奄美群島の蜂類	室 田 忠 男	… (100)
常木教授採集朝鮮産広腰眼目の蜂類 (英文)	富 樫 次 次	… (103)
アナバチ科2種の学名変更 (英文)	富 樫 次 次	… (113)
1972年台湾で採集した蜂類	室 田 忠 男	… (115)
山梨県のアナバチ科 (第1報)	須 田 博 久	… (121)
有刺類の行動等について	宮 野 正 雄	… (125)
日野山のソボツチスガリの巣	常 木 勝 次	… (127)
カギバラバチ類の採集	常 木 勝 次	… (128)

採 集 行

山梨県ハチ類採集コース	須 田 博 久	… (131)
-------------------	---------	---------

研 究 手 引

蜂類研究手引 (32)。日本産キマダラハナバチ属	常 木 勝 次	… (135)
--------------------------------	---------	---------

短 報

銀口蜂関係学名変更 (49)。筒巣に寄生したヒメバチ (49)。ウスキギングチ福井県から初記録 (54)。ジガバチモドキ検索表の訂正 (54)。日本産ジガバチモドキへの追加 (54)。キユビギングチ福井県第2の記録。岩手・秋田県で採集したアナバチ科 (76, 南部)。ガロアシギングチとニッコウギングチ (8, 78)。モウソウタマオナガゴバチの習性 (99, 富樫)。マルバツツハナバチの単 (112)。サッポロジガバチモドキ 8福井県で発見 (113)。スミスハムシドロバチの巣 (114)。ツマアカツチバチを福井県で採集 (120)。フジジガバチの福井県内新産地 (120)。スギハラギングチについて (126)。オクネギングチについて (130)。エゾマエダテの学名変更 (134)。トゲアシギングチについて (150)。ジガバチモドキの獲物 (150)。埼玉県のアナバチ科 (150, 南部)。フクシスズバチの巣 (150)。

CONTENTS

K. Tsuneki: Studies on the Formosan Sphecidae (XV)	(39)
T. Tano: Nesting biology of <i>Entomognathus brevis</i> Linden observed in Japan	(50)
T. Nambu: Biology of <i>Crossocerus (Towada) flavitarsus</i> Tsuneki, using resin to close the nest entrance	(55)
H. Yamada: Some observations on nesting habits of <i>Crossocerus dentatus</i> H.-S.	(61)
K. Tsuneki: Nests of some Pemphredonine wasps in the pith of <i>Miscanthus</i>	(63)
Y. Maeta: A nest of <i>Antidium septemspinorum</i> Lep.	(74)
T. Tano: A nest of <i>Trypoxylon nipponicum</i> Tsuneki	(77)
S. Yamane: Discovery of a pleometrotic association in <i>Polistes chinensis antennalis</i> Per.	(79)
M. Matsuura: Intracolony polyethism in <i>Vespa</i> . III. Foraging activities	(81)
T. Murota: Some aculeate Hymenoptera collected in the Amami group of the Ryukyus	(100)
I. Togashi: Tenthredinoidea of Korea collected by Prof. K. Tsuneki in 1941-43	(103)
K. Tsuneki: Taxonomic notes on two species of Sphecidae	(113)
T. Murota: Sphecidae, Mutillidae, Scolidae and Chrysididae collected in Formosa in 1972	(115)
H. Suda: Sphecidae of Yananashi Pref., Japan	(121)
K. Tsuneki: A nest of <i>Cerceris sobo</i> on Mt. Hino, Fukui	(127)
K. Tsuneki: On Trigonalioidea of Japan	(128)
K. Tsuneki: A guide to the study of the Japanese Hymenoptera (32). The genus <i>Nomada Scopoli</i>	(135)

日野山のソボツスガリの巢

K. Tsuneki: A Nest of *Cerceris sobo* on Mt. Hino, Fukui Prefecture

福井県内にソボツスガリがおることは羽田義任さんの調査で明らかになり, その生態の研究も詳細に行なわれた(生物研究, XVI: 54, 1972)。今年8月18日に田塾正さんと日野山へ行ったが, 中腹の杉並木の路上で同氏が珍品のマメギングチの集団営巣地を発見したとき, 同じ場所の1本の杉の根本に造巣していた数頭のツチスガリが, ソボであることがわかった。1日おいて20日に再びここ(高さ約400m)を訪れて2人で両方のハチの巣を掘ってみた。

ソボは, 生育時雪のために根本の曲った, 径40cmほどの杉の根に接した掌大の場所に, 4頭が巣を構えており, そこから20cm離れた, やはり杉の根本に別の1頭が造巣していた。この分離した巣を調べてみた。調査前と調査中(入口を壊さずにおいた)の38分間(12時50分より)にハチは3頭の緑色のゾウムシを巣へ持込んだ。ゾウムシは腹合わせ, 頭前方の状態ではハチの中脚で両側から抱えられている。ハチが口器を使っているかどうかは明らかでないが, どうも使っていないようであった。ナミと同様に, 獲物を抱えたまま入口へまっしぐらに飛びこむ。

内部に8個の育児室が完成していた。部屋は球形を少し引延したような形で長径12~13, 短径8~9mmで, 常に奥の方へ少し傾斜していた。その内面は平らに滑らかにされていること他のツチスガリの場合と同じである。地表は少し傾斜しており, 部屋の天井までの深さは地表から9~11cmであったが, 育児室間の高さの違いはごくわずかで, せいぜい1.5cmくらいであった。全8室は平面的に8×4cm平方くらいの中に配置されていた。

表1. *Cerceris sobo* の prey 等。

巢室	A	B	C	D	E	F	G	H
象虫 C	8	17	13	?	14	19	16	?
象虫 A	5	0	2	?	8	2	5	?
象虫 M	0	0	0	?	1	0	1	?
計	13	17	15	13	23	21	22	6
ハチの子(mm)	—	—	—	10	—	5	4	13
ハエの子(mm)	—	3	2.5	—	4	—	—	—

象虫C...*Cyrtopistomus castaneus* Roelofs クリイロクチプトゾウムシ
 象虫A...*Anosimus decoratus* Roelofs トゲアシゾウムシ
 象虫M...*Myllocerus fumosus* Faust ケバクチプトゾウムシ

いる。この姿勢から口を前胸と中胸の間につけて食べはじめらしい。卵はつめこんだ獲物の最上部におかれたものに産付されている。獲物は体位不定のようである。いっばいに詰めてあって部屋を開くとすぐボロボロこぼれるのでよく判らないが, 残っているのをみると, いろいろな姿勢でいる。ハチが抱えているのを奪った場合でも多少動くが, 巣から掘り出したのはもっとよく動き, 飛ぼうとして羽を開くものも少なくない。ハチの加える麻痺は弱いようである。象虫の中で一番多いのはクリイロクチプトゾウムシだが, ハチが持帰るのをみると, いつも緑粉で覆われていて栗色とはほど遠い。だがこの粉は落ち易いと見えて巣中のものでは緑粉は体の凹んだ場所以外には残っていない。寄生ばえの幼虫が3つの幼虫室で発見されたが, どれもただ1匹で, それも余り大きくなかったが, ハチの卵はいつも失くっていた。型通り, まず卵から食べるらしい。それから獲物の間へもぐるらしく, いつも部屋の最奥から発見された。ハチは獲物を持ちこむときに決して一時入口におくようなことをしないから, ウジがいつ獲物にくっつくのか問題である。親ばえが獲物を持ったハチの後にくっついて「糸で結ばれたように」飛ぶことはファブルがよく書いているが, 野外で実際よく見かけることだ。

育児室の内容を表に示したが, それらについて少し注を加えると, 卵は3.5×0.8mmくらいで長く, 尾端を象虫の腹部腹面の後端に近い所に附着し, 頭端は正中線に沿って胸部の中央付近に達して遊離している。ふ化したばかりの若い幼虫もこの位置にして頭部は遊離して